

令和 1（2019）年度 文部科学省委託事業

日独青少年指導者セミナー 受入・派遣事業 B3

成果報告書

特定非営利活動法人

日本冒険遊び場づくり協会

# 目 次

はじめに.....	1
事業概要.....	2
受入事業【日本】.....	3
1. 受入日程.....	3
2. ドイツ団メンバー.....	4
3. 協力機関・団体等.....	5
4. 受入事業内容.....	6
派遣事業【ドイツ】.....	21
1. 派遣団メンバー.....	21
2. 事前研修.....	22
3. 派遣日程.....	26
4. 派遣事業内容.....	27
5. Akademie der kulturellen bildung について.....	35
6. ミュンヘン市内の公園について.....	39
7. ドイツ派遣事業報告会.....	41
8. ドイツ研修前後における派遣団員の意識の変容.....	48
令和1年度（2019）事業総括.....	55

# はじめに

特定非営利活動法人  
日本冒険遊び場づくり協会 代表  
2019 年度日独青少年指導者セミナー派遣団団長

関戸 博樹

私たちは「遊び あふれるまちへ！」を合言葉に、子どもが遊びながら育つことができる環境づくりを目指した活動をしています。

今年度は、昨年度に引き続き、Spielmobil e.V. との交流を深めた一年となりました。まず、5 月 30 日～ 6 月 11 日の 2 週間、ドイツからの派遣団 7 名の受け入れ事業を実施しました。東京、埼玉、宮城、山形などを案内し、地域と連携しながら展開する日本の遊び場づくりの実践を見てもらいました。

そして、10 月 7 日(月)～ 20 日(日)の 2 週間、日本からの派遣事業として、ドイツを訪れ、「モバイル・プレイ」はもちろん、冒険遊び場、ユースセンター、子ども農園、社会文化センター、環境教育センター、メディア教育センターなどの多様な実践を見てきました。子どもが「遊ぶことで学び育つ」という共通の目的を持ちながらも、多角的に活動しているドイツの青少年活動の幅広さから多くのことを学びました。特筆すべきは「ソーシャル・ペダゴギック = Sozial Pädagogik (社会教育)」という理念、つまり子どもを含めた「人」を一人ひとりの主体として見て関わるための理論と実践の理念について持ち帰ることができたことです。

また、子どもが遊び育つことと、地域社会や国の発展は地続きであるということの信念も改めて感じる機会が多く、多くの青少年指導者から「主体的な市民が育つことにつながっている」という言葉を聞きました。自分の実践が社会的な影響力を持つという自覚と様々な工夫が、実際の子どもの育つ環境を改善し、ひいては自分たちの職業としての価値づけにもつながっていると感じました。

私たちが日本の社会で「遊び、あふれるまちへ！」を実現するしていくためには、現代の子どもたちが置かれている生活の中に、もっと主体的に過ごし方を選べる「遊ぶ」ということを、時間的にも空間的にも保障していく確かな理論と実践が必要とされています。今年度の成果は、今後の私たちの活動のなかで取り入れていきたいと考えています。

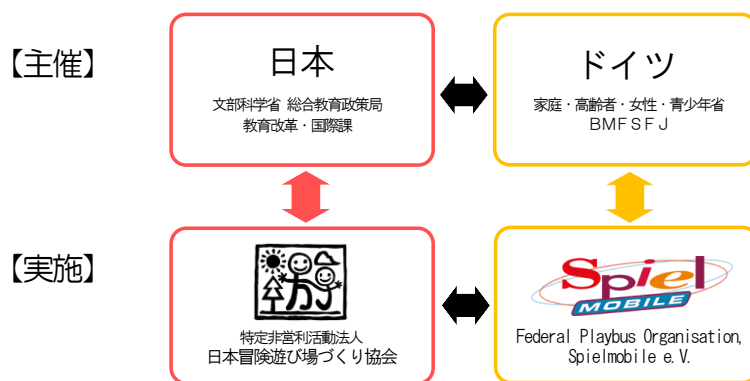
# 事業概要

## (1) 事業趣旨

日本とドイツの青少年教育の現状や取組を理解し、両国の指導者が意見交換することを通して、青少年教育指導者の資質や能力の向上を図る。

## (2) 実施関係機関

日本：文部科学省とドイツ：家庭・高齢者・女性・青少年省（BMFSFJ）との合意に基づき、「遊び場の提供を通じた青少年の育成」の分野において、特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会と、ドイツの Federal playbus organisation of Germany, Spielmobile e.V. が実施した。



## (3) 事業日程・場所

### 【受入事業】

受入行程調整 2018 年度中～ 2019 年 5 月

ドイツ受入 5 月 30 日（木）～ 6 月 11 日（火）＜東京・埼玉・宮城・山形＞  
6 名＋引率者 1 名 計 7 名

### 【派遣事業】

派遣者募集 3 月 17 日（日）～ 4 月 19 日（金）

派遣者決定 6 月 2 日（日） 6 名＋引率者 1 名 計 7 名

研修 1 6 月 2 日（日）東京にて

研修 2 8 月 10 日（土）11 日（日）東京にて

ドイツ派遣 10 月 7 日（月）～ 20 日（日）＜ミュンヘン・レムシャイト＞

報告会 11 月 23 日（土）東京にて

## (4) 研修テーマ

B③（文化分野） 遊び場の提供を通じた青少年の育成

# 受入事業

## 1. 受入日程（2019年5月30日～6月11日）

日にち	内容	
5月30日(木)	東京	羽田空港着、東京タワー観光、ホームステイ先へ
5月31日(金)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本冒険遊び場づくり協会事業説明</li> <li>・品川区立三木小学校 訪問</li> <li>・北浜こども冒険ひろば訪問・東海道品川宿散策・歓迎会参加</li> </ul>
6月1日(土)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・羽根木プレーパーク 訪問</li> <li>・日本学術会議主催シンポジウムにて講演</li> </ul>
6月2日(日)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・渋谷はるのおがわプレーパーク 訪問</li> <li>・日本冒険遊び場づくり協会国際フォーラムにて講演と交流会</li> </ul>
6月3日(月)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・Tokyo Play 事業説明</li> </ul>
	埼玉	埼玉県志木市に移動                      ・川越観光                      ・埼玉歓迎会
6月4日(火)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝霞市長表敬訪問</li> <li>・基地跡地暫定利用広場「朝霞の森」訪問</li> <li>・あさかの森プレーパーク 訪問</li> </ul>
6月5日(水)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・わこうプレーパーク、もくれんハウス 訪問</li> <li>・新倉ふるさと民家園にて和光市長と昼食会</li> <li>・新座市本多児童センター訪問    ・新座 ICT くらぶ活動紹介</li> </ul>
6月6日(木)	宮城	宮城県仙台市に移動 <ul style="list-style-type: none"> <li>・仙台市若林区長表敬訪問</li> <li>・せんだい3.11メモリアル交流館、海岸公園冒険広場 訪問</li> <li>・市内移動式遊び場 訪問                      ・講演会で講演</li> </ul>
6月7日(金)		マイクロバスにて石巻市一日ツアー <ul style="list-style-type: none"> <li>・石巻市子どもセンターらいつ 訪問</li> <li>・黄金浜ちびっこあそび場 訪問</li> <li>・にじいろクレヨン活動場所（まっちゃん八百屋） 訪問</li> </ul>
6月8日(土)	山形	山形県東根市に移動 <ul style="list-style-type: none"> <li>・クリエイティブひがしね・東根市施策説明</li> <li>・あそびあランド訪問                      ・東根歓迎会、各自ホームステイ先へ</li> </ul>
6月9日(日)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際ミニフォーラムで講演</li> <li>・さくらんぼ種飛ばしグランプリ参加                      ・遊び交流会参加</li> </ul>
6月10日(月)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・さくらんぼタントクルセンター 訪問</li> <li>・東根市長表敬訪問</li> </ul>
	東京	東京に移動 <ul style="list-style-type: none"> <li>・振り返りと今後の予定について話し合う                      ・歓送会</li> </ul>
6月11日(火)		羽田空港発                      ドイツ着

## 2. ドイツ団メンバー

**Spielmobile e.V. and Japan Adventure Playground Association** are chosen by federal Ministry for Family Affairs, Senior Citizens, Women and Youth in Germany and by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.

### Head of delegation Federal Playbus Association of Germany, CEO



#### ドイツから日本にこんにちは

We are a group of people, who are organized in the non profit organization Spielmobile e.V. and are working in one of her member organizations. We are professional in play work and we are fighting as an Non-governmental organization for the rights for children to play by practical work, as instructors or teachers for play workers and we try to make a good policy for children in our country.

We are very happy to meet your know in Japan, because the first meeting in Germany was full of experience, common learning, fun and happiness. We are sure, It will be an exciting travel to the japans play culture, which is represented for your organization

**Gerhard Knecht**

### Members self-introduction



#### Michael Dietrich

Occupation:  
Actor  
Theatre educator

Interest:  
theatre, film, photo/  
networking, inclusion  
and participation



#### Grit Eissler

Occupation:  
Educator/ Teamleader of  
a playbus project

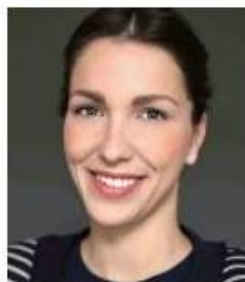
Interest:  
art, playing/gaming,  
outdoor activities,  
sew and knit



#### Susanne Endres

Occupation:  
Lecturer  
Social Worker

Interest:  
playing/gaming, Outdoor  
Activities, cooking, Music,  
sports, arts



#### Nadine Fabig

Occupation:  
Pedagogical worker for  
the Toy Van project

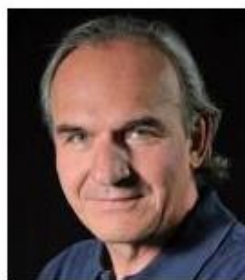
Interest:  
tailoring, opera,  
gardening, creative  
activities with textiles



#### Karla Leonhardt-Zacharias

Occupation:  
Pedagogical worker  
Teacher

Interest:  
travelling, reading,  
swimming, Japan



#### Ulrich Rauh

Occupation:  
Landscape architect

Interest:  
to photograph, hiking,  
gardening, my two dogs,  
travelling

### 3. 協力機関・団体等

受入事業を実施するにあたり、多くの機関や団体から協力を頂いた。各機関や団体とは綿密に連絡を取り合い、双方に成果が出るように調整を行った。

機関・団体名	役割
NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち	品川区内における、冒険遊び場紹介、日本文化紹介、小学校訪問に関する企画調整、ホームステイ家庭との調整
日本学術会議	シンポジウム開催による啓発
埼玉冒険遊び場 連絡協議会	朝霞市、和光市、新座市における冒険遊び場・児童館紹介、日本文化紹介、交流プログラムに関する企画調整
NPO 法人 冒険遊び場せんだい・ みやぎネットワーク	仙台市、石巻市における冒険遊び場紹介、子ども支援の取り組み紹介、講座開催に関する企画調整
NPO 法人 クリエイトひがしね	山形県東根市における冒険遊び場紹介、講座開催、交流プログラムに関する企画調整、ホームステイ家庭との調整

#### 4. 受入事業内容

### 1日目：5月30日（木） 羽田空港到着 東京都内

羽田で出迎えた後に、新馬場のレンタルスペース松本にて昼食、日本滞在中のオリエンテーションを実施。東京都内を散策し、各ホームステイ先へ移動。



羽田空港で出迎え



昼食とオリエンテーション



都内散策



都内散策：東京を一望する



## 2日目：5月31日（金） 東京都内

受入団体である日本冒険遊び場づくり協会や日本の子どもの現状について説明。  
品川区立三ツ木小学校、北浜冒険ひろば、旧東海道を視察。



冒険遊び場づくり協会についての説明



中小企業センターにて



品川区立三ツ木小学校



雅楽の授業を小学6年生と一緒に受ける



北浜冒険ひろば



子育て支援施設の視察

## 3日目：6月1日（土） 東京都内

羽根木プレーパークを視察。

日本学術会議主催シンポジウム「子どもの戸外遊びが消滅！？遊びへの社会的介入としての移動式遊び（プレーバス）」において講演およびパネルディスカッションに参加。



羽根木プレーパーク



日本学術会議講堂でシンポジウム



パネルディスカッション



ウルリッヒ氏の講演



関係者の集合写真

## 4日目：6月2日（日） 東京都内

渋谷はるのおがわプレーパークを視察。

日本日本冒険遊び場づくり協会 国際フォーラムに参加。



渋谷はるのおがわプレーパーク



国際フォーラム ゲルト氏の講演



ナディン氏の講演



国際フォーラム参加者の集合写真

## 5日目：6月3日（月） 東京都内→埼玉

Tokyo Play、道遊び に関する説明。東京における交流事業について振り返り。埼玉へ移動し、川越のまちづくり、喜多院について視察。



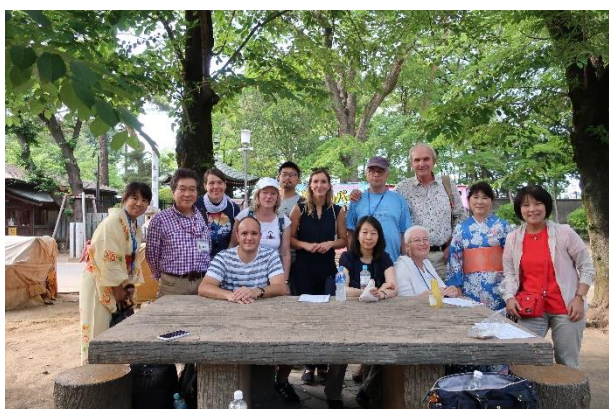
Tokyo Playについての説明



太刀川記念上大崎交流会館にて



喜多院にて



氷川神社



1日の振り返りの会



ボンネットバスで移動

## 6日目：6月4日（火） 埼玉

朝霞市役所訪問、市長より呈茶、朝霞のまちづくりについて説明を受ける。基地跡地、シンボルロード視察、朝霞の森プレーパークでゆったりと過ごす。



朝霞市役所にて



朝霞市長による呈茶



朝霞の森についての解説



遊びに来ている親子と一緒に昼食



お絵かきから始まる遊び



子どもたちと交流

## 7日目：6月5日（水） 埼玉

わこう子育てネットワーク（ちびとも・もくれんハウス）の活動、新座子育てネットワークの活動について視察。



わこう子育てネットワークについての説明



ちびとも活動を視察



もくれんハウスにて



日本の伝統的な遊びに挑戦 ふるさと民家園



新座子育てネットワークについて説明



## 8日目：6月6日（木） 埼玉県→宮城県仙台市

関東から東北へ移動。NPO法人冒険遊び場せんだい・みやぎネットワークの協力により震災メモリアル、海岸冒険ひろば視察。ミニ講演会開催。



NPO法人冒険遊び場せんだい・みやぎネットワークについての説明



「Access to Play in Crisis」と題してミツヒさんがミニ講演 若葉区中央市民センターにて

## 9日目：6月7日（金） 宮城県石巻市

石巻子どもセンター、黄金浜ちびっこあそび場、にじいろくれよんの活動について視察。



石巻子どもセンターらいつにて



黄金浜ちびっこあそび場にて



にじいろクレヨンにて



## 10日目：6月8日（土） 山形県東根市

仙台から東根市へ移動。クリエイトひがしねの団体概要、東根市子育て支援施策について説明。東根市内見学、東根市茶道連盟協会によるお茶会参加。



クリエイトひがしねの活動説明



東根市内を視察



お茶会



ホームステイ先の家族と対面



交流会にて

# 11日目：6月9日（日） 山形県東根市

国際ミニフォーラム「ドイツから学ぶ遊びあふれるまち・ひがしねへ」にて講演  
あそびあランドにてドイツの遊び交流会



ゲルトさんの講演



ディスカッション



タントクルセンターにて



あそびあランドにて



子どもたちと遊ぶ



あやとりで交流

## 12日目：6月10日（月） 山形県東根市→東京

さくらんぼタクトクルセンター内けやきホール視察、東根市長表敬訪問。東根市から東京へ移動。

全行程の振り返り、次年度に関する意見交換、フェアウェルパーティー。



けやきホールについての説明



東根市長を表敬訪問



ドイツの国旗色のドリンク



見送りに来てくれたホームステイ先の子どもたちに手を振る



フェアウェルパーティー

# ドイツ団 日本各地を巡る

## 日本文化と子どもの日常に触れる (東京都・品川区)

東京都品川区立三木小学校では、校長・副校長先生に「日常の様子を自由に見て下さい」と案内され、低学年教室では教壇に導かれ質問を受けました。図工室ではグループ、個人で割りばしで工作という授業。子どもの一人が団長に作品をプレゼント。ゲルハルトさんは大喜びでした。6年生は体育館で雅楽の演奏鑑賞と体験の授業でした。最後は教室の窓から「さよなら。Auf Wiedersehen」と叫ぶ子どもたちに大声で返すドイツ団でした。見学後に「日本の教育は規律性を重んじている」と指摘され、多様性の教育も提唱されている昨今ですが、学びを遊びに転換する必要性を私はより感じた次第です。

(杉本将輝)



## 市民が守る朝霞の森を満喫 (埼玉県・朝霞市)

朝霞市では市長から呈茶のおもてなしを受けた後、プレーパークの開催を行っている「朝霞の森」という広場を中心に過ごしました。市民が手作りでルールや環境をつくる広場のあり方を見て、「これからも、ぜひこの素晴らしい運営スタイルを維持し続けて欲しい」とドイツ団からコメントがありました。

お昼ご飯にはプレーパークに遊びに来ている親子が焚き火で作ったご飯と豚汁を一緒に食べたり、夕方に遊びに来た小学生発案のお絵描きゲームでゆったりと交流を楽しみました。

(関戸博樹)



## 遊びや遊び場の果たす役割の共通部分を発見（宮城県・仙台市）

宮城県では、主に東日本大震災との関連で、仙台のほか石巻で3か所の活動をまわりました。仙台では、震災での被災・休園を経て再開して1年の海岸公園冒険広場と、震災をきっかけに周辺で展開するようになった移動式遊び場の活動場所を巡りながら、意見交換をしました。夜には「危機的状況での遊び場づくりとその意義」と題した学習会を開催、ミハエルさんを中心に、被災地域や難民キャンプなどでの移動式遊び場の取り組みの話を20名の参加者で聞き、遊びや遊び場の果たす役割に共通する部分が多いことが確認できました。（根本暁生）



## 言葉の壁を感じさせない遊びの力（山形県・東根市）

初日、山形県東根市の担当課からドイツの皆さんに子育て支援施策を紹介したところ、詳細にわたる質問があり、市の子育て支援内容やNPOとの協働で行っている遊び場運営にとっても関心をもって頂き、自分たちの新たな励みにもつながりました。東根で開催した国際フォーラムでは、ドイツの移動型遊び場の取り組みを知ることができ、ドイツのプレイワーカー達との遊びの交流では、「言葉の壁」を全く感じることなく一緒になって遊ぶ子どもたちの姿は、「遊び」が世界共通なんだということを私たちに教えてくれました。（伊勢博）



# ゲルハルトさんからの手紙

訪問した品川区立<sup>みつぎ</sup>三木小学校の子どもたちに、ゲルハルトさんからお礼の手紙が届きました。

こんにちは、小学校のみなさん

みなさんは素晴らしい生徒たちであり、ドイツの代表団は、みなさんの持っている豊富な知識や学ぶスピードに感心しました。そして、教室内外の装飾や展示も素晴らしかったです。教室内外の装飾や展示などは、良い学習環境をつくるためには重要なことです。

図工の授業に参加したことが、私自身の思い出です。その授業で、割り箸で出来た作品をもらいましたが、今でもドイツの子どもたちに、その作品をどのように使い、どのように作るのかを教えています。

演劇、音楽、手芸といった芸術の世界における創造性は、数学や科学と同じくらい人生を豊かにするために大切なことです。そして、もし学校でうまくいかないことがあっても、落ち込まなくていいんですよ。

アルバート・アインシュタインはドイツの有名な科学者ですが、彼は学校ではうまくいかず、成績もあまりよくありませんでした。しかし、後に相対性理論を生み出しました。子どもの頃、アルバートは何が一番好きだったのでしょうか？それは、友達と遊ぶことでした。

アルバート・アインシュタインに関するこの物語から、私たちは何を学ぶことができるでしょう。

たくさん遊ぶ人には、遊んだり、そこから新しい考えを思いついたりすることで、たくさんのお考えや価値観を得ることができます。

ドイツと日本は距離が離れていますが、できる限り一緒に遊んでいきましょうね。

遊び心がある子になってくださいね。

親愛を込めて。

ゲルハルト・クネヒト（ドイツの連邦プレイバス組織代表）

## ホームステイ受入

7名のドイツ団をホームステイで受け入れたのは、東京・品川で4泊、山形・東根で2泊で、合計すると14家庭です。予定がある毎日の中、それぞれ宿泊する家で家族と過ごした時間で日本の暮らしを感じてもらうことができました。

我が家に来てくれたのは、今回のリーダーであるゲルハルト・クネヒトさんでした。実は我が家でホームステイを受け入れるのは全く初めての経験で、家族一同緊張していました。

初日の夜、皆で家に帰ったのは夜の9時過ぎ。旅の疲れもあるだろうと早めに寝る予定でしたが、彼の家に入って最初の一言は「さあ、何をして遊ぼうか？」でした！

びっくりしつつも遠慮なくカードゲームを出す娘……。その後一緒にドイツのトランプゲームをして遊び、さらにトランプを使った手品まで教えてもらいました。その日はそれでおしまいでしたが、次の日の朝まで練習に付き合ってもらい、すっかり手品をマスターした娘が出かける前に披露してくれました。手品は大成功で、本気で驚く私と得意げな娘、それを笑顔で見守ってくれたクネヒトさんの笑顔が本当に良い思い出です。

あっという間の3日間で家でゆっくりする時間もあまり無かったのが残念でしたが、楽しいというか、大変貴重でありがたい3日間でした。このような体験をさせて頂いて、本当にありがとうございました。

(山形県の黒崎誠介さんの感想文より)



# 派遣事業

## 1. 派遣団メンバー

	氏名	勤務先・所属団体等	職名等
1	関戸 博樹 (団長)	特定非営利活動法人 日本冒険遊び場づくり協会	代表 プレイワーカー
2	相澤 孝紀	特定非営利活動法人 プレイフルエンタープライズわかば	代表理事 プレイワーカー
3	佐藤 公俊	フリーランス	プレイワーカー
4	清水 葉月	石巻市子どもセンターらいつ職員	職員
5	土肥 潤也	NPO 法人わかもののまち	代表理事
6	根岸 基子	にしなりジャガピーパーク	マネージャー兼運営委員 プレイワーカー
7	村野 裕子	NPO 法人 子育て家庭支援センターあいくる	理事・施設長



2019 年度 派遣団

## 2. 事前研修

(1) 第1回 2019年6月2日(日)

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター

(東京都渋谷区代々木神園町3番1号)

通常総会：センター棟 309号室

国際フォーラム第1部：国際交流棟 国際会議室

第2部：国際交流棟 レセプションルーム

スケジュールと目的：

10：30～12：00 日本冒険遊び場づくり協会 第16回通常総会 参加

本事業の主催団体である当会の全国的な活動や取り組みを理解する。

子どもの遊び場づくりの現状や課題、これから期待されることなどに気づき・学ぶ機会とする。

13：30～20：00 冒険遊び場づくり国際フォーラム2019 参加

第1部「ドイツから学ぶ 遊びあふれるまちへ！～遊び・文化・教育の力～」

ドイツにおけるモバイル・プレイ等の取り組みについて知見を得る。

第2部「交流会」

10月の派遣時にドイツで受け入れてくれる団体と交流を深める。

【研修レポートより：抜粋】

Grit Eissler さんのプレイバス活動”積み木工事現場プロジェクト”から

◇渡独時にさらに深めたいこと

この積み木プロジェクトを通して、子どもたちがただ積み木でまちを建設して終わりではない、沢山のねらいを感じた。

一つ目は、子どもたちのチームワークや協調性を育むこと。二つ目は、集中力や手先の器用さを養うこと。そして三つ目は、子どもたちの想像力や創造性を育むことである。

しかしこのようなねらいはどのように評価されるのか、またはこのプロジェクトは大人が評価をせず、子どもたちが自己評価をする場なのかどうかなどが気になった。今回の場合は学校で行うこともあり、このような活動が学校でもどう位置付けられているのか、それにより子どもたちが自由に表現を行うことに影響して来るのではないかと感じた。

また、子どもたちの中には、与えられた積み木でまちをつくるのが得意な子もいれば、どのようにつくったらいいのかわからない、自分の思いが上手く形に出来ずに苦手だと感じる子もいるかもしれない。そのような場合にどのようにプレイワーカーが子どもたちへ関わっているのか、どのように子どもたちの思いを形にしていくことを手伝っているのかが気になった。例えばこのような表現活動を行う場合に、アートについて専門的に特化したワーカーがいるかどうかでも、子どもたちの積み木活動に影響するのではないかと思う。

## 社会における子どもの遊び

ドイツ派遣団の皆さんを拝見し、最初に驚いたことは『ベテランの多さ』です。

Spielmobile という取り組み自体が 50 年以上に及ぶ歴史ある取り組みのことで、それもまた当然のことかもしれませんが、子どもの遊び場づくりという仕事にベテランの方が 関わり続けられる人的・経済的な層の厚さ、社会における『遊び場』『ワーカー』という言葉が歴史のある言葉であることなど、『子どもが遊ぶこと自体』への理解度の高さを強く感じました。

ゲルトさんが仰っておられたように、社会に対して働きかけ続ける・諦めないことが理解度の高さや『子どもの遊び』という概念に対しての市民権獲得につながったと感じられます。そういった、たゆまぬ積み重ねの結果であるという背景を知った上でも、日本における『子どもの遊び』に対する社会の反応はやはりまだ寂しい部分が大きく、私にもできる余地があるのでは、と感じました。

最も素晴らしいと感じたことは、「遊びとは、子どもが育つために必要な教育的要素である」といった社会的意義が定められていること。これに尽きます。もちろん、意義の内容が賛成できる内容であることも素晴らしいのですが、定められているという事柄自体がとても大きいことです。

総会でも地方の方から『プレーパーク、プレーリーダーの定義が無いことで説明が難しい』という声があったように、社会に広くひろめていくためには誰にでも届く言葉で定義づけがなされていることは大きなアドバンテージとなり得ます。



(2) 第2回 8月10日～11日

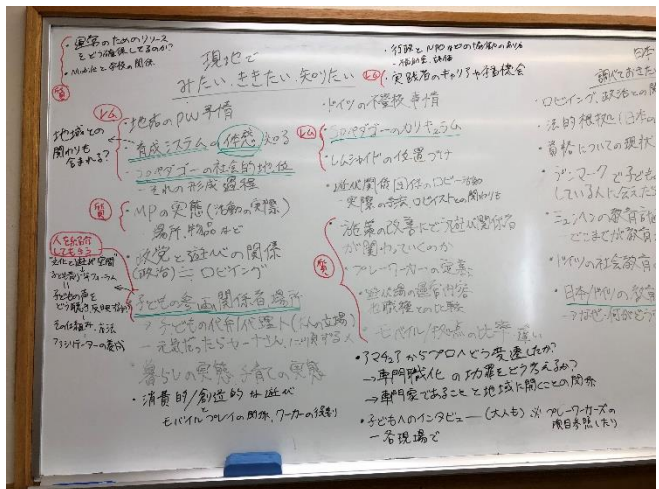
会場：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区代々木神園町3番1号）

日	時間	内容	講師等
8/10 (土)	13:00～14:00	ドイツに関係する配布資料についての確認 参加者顔合わせ、自身の背景 子ども観・遊び観の交流	企画委員
	14:00～15:30	昨年度事業の報告 プレイバスの取り組み 遊び・文化・教育の力	佐藤、土肥、根岸、 村野、関戸
	15:30～17:00	発表： 日本における子ども施策、法律 日本の遊び場づくり（冒険遊び場、移動型）の実態	2019年度 派遣団メンバー
	17:00～18:00	訪独準備に関して ・持物・保険、Wi-Fi、ホームステイ、おみやげなど	佐藤、土肥、根岸、村 野、関戸 （一部、企画委員）
	18:30～	交流会（自費・任意参加）	—
8/11 (日)	10:00～12:00	ドイツの子ども・若者施策について	2019年度 派遣団メンバー
	12:00～13:00	昼食	—
	13:00～15:00	ドイツで更に学びたいこと、事前にもっと調べておくことの整理	矢野勇樹
	15:00～16:30	報告会準備・報告書作りに向けて	企画委員

【概要】

2019年度は派遣事業が2年目となり、派遣メンバーの4人は昨年度メンバーでもあるということをかき、メンバー相互で学びを深める研修とした。昨年度の学びの成果を深めるとともに、特に要望が多かった「ドイツの子ども・若者施策」に関する内容については、「ドイツの子ども・若者参画の今 —ドイツスタディツアー報告書」をテキストとして用い、メンバーがそれぞれ関心のある部分を事前に学習し、それを元に発表、意見交換をするという形式を取った。

参加型の研修となったため、非常に活発に質問もなされ、ドイツで学びたいことの整理にもつながった。また、派遣期間中に現地で訪れる視察先に対する要望や、現地で行うワークショップの内容についても意見交換を行った。さらに、帰国後の報告会や報告書についてもあらかじめ意見交換をすることで、現地での研修についてイメージを膨らめさせることができ、派遣団として本格的なチームづくりをスタートができた。



### 3. 派遣日程

日にち	内 容
10月7日(月)	各地から羽田空港集合 出発 ミュンヘン国際空港 到着、各ホームステイ先へ移動
10月8日(火)	エコロジカル エデュケーションセンター ミュンヘン 訪問 Munich Ecological Education Centre (ÖBZ) もぐらのお家(プレーパーク) Maulwurfshausen 訪問
10月9日(水)	ニュルンベルグとフルトへ Nürnberg and Fürth フルト郡モバイルバス事務所を訪問し、プレイバスに積み込む道具や素材等、プレイバスの運営等について説明を受ける Jugendfarm(若者農場) 訪問 ニュルンベルグの公園内にある“Street of Humans Rights”and“Street of Children’s rights”(人権・子どもの権利条約ストリート)を訪問 フルト郡役所にて郡長 Mr. Diebl を表敬訪問、Fürthの子育て政策やプレイバス政策、子どもの遊びについての説明を受ける
10月10日(木)	国際プレイバス大会(会場: QUAX)に参加
10月11日(金)	ミュンヘン市の公共公園と児童公園を自転車であぐる 元・ミュンヘン市建設部門緑地計画責任者の Ulrich Rauh 氏による案内
10月12日(土)	冒険遊び場やプレイバス関連の人々たち向けに日本の一般的な遊びワークショップ開催(イタリアチームと合同) ミュンヘンオリンピック旧選手村の遊び場を見学 日本団とドイツ団の1週目の合同振り返り
10月13日(日)	「世界こどもの日」の2会場において日本の遊び紹介ブース出展
10月14日(月)	ミュンヘン→レムシャイトへ移動 Academy der Kulturellen Bildung(文化教育アカデミー)施設案内 Press Interview、Academyのディレクターによる Welcome Dinner に参加
10月15日(火)	デュッセルドルフへ Düsseldorf Abenteuer Spiel Platz Eller(エラー冒険遊び場) 訪問 Akki Aktion & Kultur mit Kindern e.V.(文化施設) 訪問 Mobiles Musikmuseum(モバイル音楽遊び) 訪問
10月16日(水)	ヘルテンへ Herten WALD RITTER e.V.(森の騎士) 訪問 ロールプレイ、演劇、脱出ゲームなどを体験 アカデミーの遊び分野に関する説明
10月17日(木)	ケルンへ Köln Bauspielplatz Friedenspark(バウイ冒険遊び場平和公園) 訪問 Abenteuerhallen Kalk(カルク冒険ホール) 訪問
10月18日(金)	日本団とドイツ団の合同振り返り 日独事業担当の IJAB(交際青年活動)の Mrs. Claudia Mierzowski からドイツの青少年活動に関する制度について説明をうけ、意見交換 レネップへ Lennep DIE WELLE e.V.(ユースセンター) 訪問
10月19日(土)	フランクフルト空港→羽田空港
10月20日(日)	羽田到着 解散

#### 4. 派遣事業内容

訪問団体名	Jugendfarm (若者農場)
場所	Erlangen (エアランゲン市)
回答者	リーザさん、実習生ビビアンさん
スタッフ数・構成	全体で13人、数名がフルタイム
年間事業費	有料プログラムの実施、個人会員費56ユーロ/年
活動頻度、時間	休日のプログラム、月曜日～金曜日に固定のプログラムがある。平日はグループは予約制。
対象者、年齢層	基本は3歳から14歳、高齢者や障がい者、職業教育学校など様々な人も来る。毎週木曜と金曜はオープン・ドア・デイで誰でも来ることができるようになっている。
活動内容	<p>①動物とのふれあい ポニーやロバなどの動物たちに出会うことが中心の目的 セラピーや環境の拠点</p> <p>②環境教育</p> <p>③冒険遊び場：建設場で子どもたちが自分たちで道具を使い建設する</p> <p>④工房：木材、鍛冶屋体験スペース</p> <p>⑤畑：ハーブや野菜、火の場所を使って料理も行う</p> <p>⑤森体験</p> <p>⑥クリエイティブ活動 毎年テーマを職員が決める。今年は「蜂と植物と動物の多様性」テーマは、環境と社会問題を中心的に選ぶ。</p> <p>⑥インクルーシブ活動：子どもがやりたいことを実現できる環境をつくる</p>



Jugendfarm (若者農場)



訪問団体名	ÖBZ (エコロジカルエデュケーションセンターミュンヘン)
場所	München (ミュンヘン市)
回答者	マーク・ホークさん
団体の設立経緯	森林がなくなるなどの環境問題が、1970年代から問題視され、1990年代に深刻になり、環境教育を目的に社団法人を作ることになった。2001年にセンターの運営開始され、その時の課題は持続可能な発展の教育や環境教育だった。
団体・活動の目的	①環境教育、②持続可能な発展
スタッフ数・構成	7人の職員。25人のフリーランス。
事業費の支出元	ミュンヘン市からの助成。学校からの訪問で行われるワークショップはひとクラスあたり、3時間で90ユーロをもらう。
広報の方法	プログラムが掲載されているパンフレットを学校に送付。学校側もこの施設を知っているので問い合わせが来る。またミュンヘンには、たくさんの学校外教育機関があり、それらをインターネット上のプラットフォームで調べることができる。
活動場所及び選定理由	周辺の6.5ヘクタールの緑地とセンター
活動頻度、時間	毎日9:00～12:00と15:00～18:00まで。18時以降は大人向けに行うこともある。
対象者、年齢層	幼稚園児から大人まで。
活動内容	<p>テーマは、「自然体験・理解」「自然クリエイティブ(政策)」「自然空間」「食事」「人生の価値」</p> <p>①主に屋外での幼稚園や学生向けのプログラムの提供  学校向けのプログラムは学校の先生と話し合いながら作成している  幼稚園でも正義・正当性や人間関係について自然から学ぶ  自分の手で触れてみることを通じて、五感で自然を感じることを大切にしている(名前を覚えることが重要ではない)  (例)ねんどを使って地球を作るプロジェクト、一皿の食事にどのぐらいの畑が必要か(エアピュッフェ)などのプロジェクト</p> <p>②市民の畑プロジェクト 25人～50人のボランティアと一緒に畑を作っている</p> <p>③果樹園</p> <p>④職業学校生のためのプロジェクト  畑づくりからチームワークを学び、将来どんな仕事に就くか考える</p> <p>⑤チームビルディングワークショップ</p>
地域住民や地域の学校や施設との連携	地域住民や地域の学校や施設との連携：学校とコンタクトを取りプログラムを作っている。また市民が管理運営する畑も敷地内に有している。
課題	今の子どもたちは運動能力が低くなった。自然と触れ合える機会も少ないし、触れる勇気もないように感じる。望んでいるのはここに来ている子どもたちだけでなく、普通の学校にも自分たちと同じような哲学をもってほしい。
今後の展望	若い世代が政治的に活躍してくれること。



ÖBZ (エコロジカルエデュケーションセンターミュンヘン)

訪問団体名	Abenteuer Spiel Platz Eller (エラー冒険遊び場)
場所	Düsseldorf (デュッセルドルフ市) Eller 地区
回答者	トーマスさん (所長)
団体の設立経緯	デンマークの冒険遊び場のアイデアを、社会教育を学んでいた大学生たちがデュッセルドルフ市に掛け合い、青少年活動のひとつとして 1973 年に設立された。
団体・活動の目的	子どものために余裕のある空間をつくり、その空間を守ること。
スタッフ数・構成	開催日は 5 人のスタッフがいる。うち 2 人は実習生。
年間事業費	25 万ユーロ
事業費の支出元	人件費 10 万ユーロ (二人分) + 運営費 15 万ユーロがデュッセルドルフ市から支出されている。運営費のうち 9% を自分たちで稼ぐ契約になっている。社団法人の会費 (6 ユーロ以上 / 人 × 350 人の会員) と洞窟のゲームの参加費 (10 ユーロ / グループ)、交通違反の罰金の分配金で賄う。
人件費の割合、人件費は何に対して支払われる?	人件費は 10 万ユーロ程度
広報の方法	ホームページ、Facebook、Instagram、YouTube が中心。広報担当者がある。紙のチラシは環境に良くなく、効果がないため、ほとんど作らなくなった。
活動場所及び選定理由	土地が残っていたので、偶然この場所になった。全体で 11,000 平米ある。
活動頻度、時間	夏季は、月曜日～金曜日が 14:00～19:00、土曜日が 14:00～18:00。冬季は、月曜日～金曜日が 14:00～18:00
活動内容	①ヤギ、羊、ウサギを飼育しているエリア 子どもたちと一緒に世話をすることもあるが、入れる時間が決まっていて、看板で知らせている。時間が決められているのは動物たちを休ませるため。 ②建設遊び場。 50 の建物がある。建物についている看板によって、その建物に手を加えて良い人がわかるようになっている。 ③火は誰でも使えるような形になっている。 料理や鍛冶屋遊びもできるようになっている。スキルが上がった子どもには「アウトドア証明書」を発行している。 ④大型のアスレチック遊具 子どもたちの声を取り入れながら、スタッフが作った。子どもたちの声を聴くことで、遊具に対して愛着を持ち、大事にしてくれる。 ⑤洞窟ゲーム 暗闇の個室から手探り、感覚を元に脱出を図るゲーム。脱出に成功すると証明書がもらえる。
プレイヤーの募集、選考方法	ソーシャルワークの勉強をした人。屋外での仕事に耐えられるかも重要な条件。動物がいるので、アレルギーがないかも基準になっている。現場で様々なスキル (大工仕事など) が求められることがあるが、後々身につけることができれば最初はできなくて良い。
研修	自主研修で学び合うこともあるが、研修会に参加することもある。来年は、鍛冶屋遊びの研修を行うことになっている。
地域住民や地域の学校や施設との連携	週に 1 回、数時間、定期的にご利用しているグループがある。その子達には様々なアウトドア証明書 (パンケーキを焼けたり、綱渡りができたり、洞窟から脱出できたり) を発行している。
利用者からの評価	ほとんどが良いもの。大人からは自分の子ども時代を思い出すとの声もある。自分が子どもの頃この場所で遊んでいて、子どもを連れてくる親もいる。



Abenteuer Spiel Platz Eller  
(エラー冒険遊び場)

訪問団体名	MUTTER LADEN (お母さんの店)
場所	München (ミュンヘン市)
回答者	エヒシュタイン・シモーノさん
団体の設立経緯	「家族が会える場所」「助け合うことができる場所」「共同体」を目指し、34年前に設立された。
スタッフ数・構成	25～30人。ほとんどが母親世代で高齢女性も所属している。男性は少なく、事務員が1人だけ有償。残りはボランティア。
事業費の支出元	ミュンヘン市からの補助金、社団法人の会費(個人:4ユーロ/月、家族:5.5ユーロ/月)、喫茶店の売り上げ。
対象者、年齢層	ほとんどが0～2歳の親子。
プレイバスに積んでいるもの	塗り絵、絵の具、色鉛筆、風船、黒板。静かな遊びができるように。
活動内容	部屋を持っているので、そこを解放して、子育て広場(遊び場)をやっている。喫茶店の運営も。夏には出前の広場をすることがある。
プレイヤーの募集、選考方法	特に資格はないが、ドイツ語ができることが条件。ドイツ国籍がなくても良い。
研修	喫茶店で働くスタッフのための衛生面の講習。広場のスタッフは、子どもとの関わり方に関する研修を行なっている。
地域住民や地域の学校や施設との連携	直接的な関わりはないが、様々なネットワークに入っているため、どこかで繋がっている。
課題	スタッフの確保が課題になっている。とくに若い世代の人にスタッフになってもらうか課題。



MUTTER LADEN (お母さんの店)

訪問団体名	WALD RITTER e.V. (森の騎士)
場所	Herten (ヘルテン市)
回答者	ダニエルさん、ズーイさん
団体の設立経緯	2007年に自然体験活動を中心に、ボーイスカウトのような形でスタートした。保護者たちから毎週やってほしいとの声が上がリ、最初は別の仕事しながら副業的に活動を行っていた。2008年に「都市の中の冒険」の活動をスタートし、その後はできる限り都市の中で活動を行なっている。2014年からは「エスケープルーム」の活動もスタートし、2016年からヘルテ市での活動を始めた。
団体・活動の目的	参加者が中心になること。民主主義的なやり方で、子どもの自信がつかうことが重要。
スタッフ数・構成	11人+フリーランサー。2012年までは名誉職やボランティアで無償だった。
年間事業費	75万ユーロ
事業費の支出元	基本はプログラムの参加費で賄っている。プロジェクトによって補助金をもらっているものもあるが、行政からの補助金の割合は少ない。
広報の方法	Facebook、ニュースレター、フライヤー、口コミ。公園でプロジェクトをやることで宣伝にもなる。
活動場所及び選定理由	Hertenは貧しい世帯が多く、緑地にいけない子も多い。緑の経験をさせたいから森の中での活動を行い、連れ出している。また、まちが豊かになること、まちを魅力的にすることでまちを出たくない気持ちが生える。まちに貢献すること、まちに価値を感じることを両方を実現する。
活動頻度、時間	毎日3～4イベントを全ドイツのどこかで実施
活動内容	ノンフォーマル教育をインタラクティブな方法で行なっている。演劇、冒険教育、メディア教育、ドラマゲーム、ライブ・アクション・ロールプレイ、エスケープゲーム、ロードテイク(ボードゲーム図書館)など。
地域住民や地域の学校や施設との連携	地域の企業や、警察と協力して、「職業教育×謎解きゲーム」を行なっている。警察になりきり、捜査名目で企業を訪問、仕事の説明と体験をしていく。同時に謎解きゲームが進行していく。

訪問団体名	Akki (Aktion & Kultur mit Kindern) e.V.(アキ:子どもたちとの文化活動センター)
場所	Düsseldorf (デュッセルドルフ市)
回答者	トムさん、ソニヤさん
団体の設立経緯	学校にずっといると頭が爆発してしまうという課題感から活動が始まった。最初は移動型の遊び場づくりをしている団体だったが、現在は施設運営がメインになっている。今も移動型遊び場のネットワークにも参加し、移動型プロジェクトも行なっている。
団体・活動の目的	子どもが自分で決めて自分で遊ぶこと。「Learning for Doing」が原則。学校ではないので、飽きたら途中でやめても大丈夫。
スタッフ数・構成	11人(パートタイマー含む)
年間事業費	120万ユーロ
事業費の支出元	50%はデュッセルドルフ市から、5%は州から助成が出ている。残りの45%は地域内での活動や、展覧会、道具のレンタルでの収入で賄っている。子どもの参加は無料。
活動内容	文化教育の取り組みが中心で、工房的な性格が強い。内容は展覧会、メディア教育、料理、ダンス、彫刻、子どものまち、コンサート、移動型の難民向けのプロジェクト等。それぞれのプロジェクトにその道の専門家、芸術家が加わり、子どもが実現したいことの手助けをしたり、子どもたちのアイデアを形にする役割を担う。
研修	専門家、芸術家たちとプロジェクトを新たに始める際に、一緒に研修を行う。プロジェクトで大切にしたいことを全員で共有し、専門家、芸術家には「専門家が作れば素晴らしいものができるのはわかっているが、主役は子どもである。大人の役割は子どもたちがやったこと、やりたいことを認めてあげること」ということを伝える。理論だけでなく、実践もその場で行う。例えば、プロジェクトの冒頭、どう初めていくかの方法を議論し、実践してみる。
地域住民や地域の学校や施設との連携	小学校に道具を持ち込んで、文化的プロジェクトを行うこともある。



WALD RITTER e.V. (森の騎士)



Akki (Aktion & Kultur mit Kindern) e.V.  
(アキ:子どもたちとの文化活動センター)

Abenteuerhallen Kalk (カルク冒険ホール)

訪問団体名	Abenteuerhallen Kalk (カルク冒険ホール)
場所	Köln (ケルン市)
回答者	イナさん、フローヤンさん
団体・活動の目的	Bauspielplatz Friedenspark と同じく、「ケルン青年センター」という非営利の有限会社に所属している。この団体には、21 の施設が所属している。
スタッフ数・構成	6 人＋コーチが 120 人ほど (他のスポーツ団体で働きながら)
事業費の支出元	センターの利用料、機材・場所のレンタル料の収入がある。連盟や財団に申請して補助金をもらっている。残りはケルン青年センターからの分配金。予算はケルン市が 51%、青年援助団体が 49%を支出している。
活動場所及び選定理由	昔はトラクター工場だったところをケルン市から借りている。(ミュンヘン市では工場の跡地を市が買い上げ、住宅や青少年活動に利用することがある。)
対象者、年齢層	12～27 歳
活動内容	5,000 平米の敷地に常設のクライミングウォール、スケートパーク、オフロードバイクのコースがある。ホールではアクロバティックサーカスやバスケットをすることもできる。開所日にはコーチが常駐している。若者の流行りのスポーツができるようにしている。施設内には自転車屋が入っており、販売もしている。2 階にはシルクスクリンができる設備もある。長期休暇の際にはキャンプや 1 週間のワークショップも行なっている。
プレイヤーの募集、選考方法	スポーツ教育もしくは社会教育を学んだ人であることが条件
地域住民や地域の学校や施設との連携	ケルン市は住宅が不足しているため、倉庫を住宅にするか市民会議が開かれた。隣の倉庫は壊して別の場所に移ることになった。この場所も同様に検討されたが、利用者の若者たちがロビー活動を行い、ここはそのまま残ることになった。

訪問団体名	Bauspielplatz Friedenspark (バウイ冒険遊び場平和公園)
場所	Köln (ケルン市)
回答者	ロンダ・ウムパッハさん
団体の設立経緯	もともとは移動型の活動をしていた。しかし、実施に毎回申請書が必要で、手間がかかるので、常設の遊び場に移行した。昨年、40周年のイベントを行なった。
団体・活動の目的	「ケルン青年センター」という非営利の有限会社に所属している。青年センターのミッションは、①オープンな青少年活動、②学校外教育、③参加型、④政治教育、⑤個人の発展、⑥インクルージョンになっていて、それに沿った活動をそれぞれの施設で決めている。
スタッフ数・構成	6人(リーダー3人+事務員1人+学生インターン2人)+30人(ボランティア)
広報の方法	学校に出向いて説明会を行ったり、SNSでの発信を行う。夏祭りにも出展する。ケルン市はカーニバルが盛ん。カーニバルの団体と連携してネットワークを組んで広報もしている。そこから寄付がもらえることもある。
活動場所及び選定理由	元々はプロシア時代の砦。ケルン市から特別の許可を得て活動している。
対象者、年齢層	6～21歳
活動内容	冒険遊び場、室内の青年センター、カフェ、レンタルスペース、乳幼児スペース、予約制の学童クラブ
プレイヤーの募集、選考方法	リーダーになる人は資格が必要。現在の3人は教職、ソーシャルワーカー、放課後の先生の資格を持っている。
地域住民や地域の学校や施設との連携	定期的に施設を利用する全日制の学校のグループがある。学校のソーシャルワーカーとネットワークを作り、情報交換を行なっている。
課題	子どもの独立性、子どものコンピテンシーを発展させる取り組み。子どもには参画がどういうものであるかを体験してほしい。

訪問団体名	MAULWURFSHAUSEN ADVENTURESPIELPLATZ (もぐらのお家)
場所	München (ミュンヘン市)
回答者	フリッシュ・マティアスさん
団体の設立経緯	1974年に保護者の集まりとして団体が設立され、ミュンヘン市の公園を勝手に占領することから活動が始まった。活動が公的に認められるようになってきて、1979年には、Kreis Jugendring (郡若者協議会)との契約を行い、現在に活動に繋がっている。
スタッフ数・構成	職員は4人(フルタイムは2人)、ボランティア1人、幼稚園の実習生
年間事業費	おおよそ人件費16万ユーロ/年、事業費1万2千ユーロ/年。なお、人件費は3.15人分の給与を4人で分配している。事業費として年2.8～3万ユーロ必要で、足りない部分は、①Kreis Jugendringに申請、②子どもの誕生日会などに貸出、③寄付、④ソーシャルデーなどで賄う。
事業費の支出元	Kreis Jugendring (郡若者協議会)とミュンヘン市の青少年局からの助成
対象者、年齢層	6歳から14歳まで。保護者は遊具エリアに基本立ち入り不可。しかし、敷地内の併設されている幼稚園の子どもと保護者が午前中に遊ぶという例外もある。グループは予約制で、個人はいつでも自由に来ることができる。休日は個人が多い。学校が全日制になり、平日は16時以降に学校単位で来ることが多い。月曜～木曜日は決まった学童グループが来る契約になっている。 もともとのコンセプトでは子どもが自分の意思で来てもらうようにしている
活動内容	冒険遊び場の提供
課題	①エコロジー環境問題：良い環境を与えることは子どもの将来に重要であるから。 ②自発的にここに来る子が少ないこと
今後の展望	大人も子どもも心の病が多い。子どもが自由に遊べる空間が必要。



Bauspielplatz Friedenspark (バウイ冒険遊び場平和公園)



MAULWURFSHAUSEN ADVENTURESPIELPLATZ  
(もぐらのお家)

DIE WELLE e.V. (ユースセンター)

訪問団体名	DIE WELLE e.V. (ユースセンター)
場所	Remscheid (レムシャイト市) Lennep (レネップ地区)
回答者	ブルシンスオさん
団体の設立経緯	プールの跡地で、新しいプールの建設に伴い、若者たちから要望があった若者施設をつくることになった。
スタッフ数・構成	25人(12人はフルタイムで、13人は学生、パートタイマー等)
年間事業費	80万ユーロ
事業費の支出元	青少年活動に関してはレムシャイト市から補助金が出る。大人向けのプロジェクトでは参加費をもらうこともある。
広報の方法	Facebook、Instagram、紙での広報が中心で、チラシは施設周辺より少し広い地域に配布している。地方の放送局が取材に来ることもある。一番効果のある広報は、利用者の口コミで、信頼度が高いのが理由。
活動頻度、時間	月曜日は 15:00 ~ 19:00、火曜日は 14:00 ~ 19:00、水・木曜日は 14:00 ~ 20:00、金曜日は 15:00 ~ 20:00 となっている。
対象者、年齢層	子どもから大人まで、具体的には 6 ~ 60 歳くらいまでの人が利用できる。
活動内容	ダンス、音楽、メディア教育、朗読会、バンドフェスティバル、写真等
プレイヤーの募集、選考方法	芸術教育、スポーツ教育、演劇教育、ソツィアル・ペタゴギック (Sozial Padagogik) の資格を持っているのが条件。
地域住民や地域の学校や施設との連携	地域住民や地域の学校や施設との連携：演劇やラジオドラマのプロジェクトを行うために、地域の学校に出向くこともあれば、クラス単位でこの施設に来ることもある。地域と連携して、まちのイベントには積極的にブースを出展している。また、住宅組合と一緒に芸術のプロジェクトを行ったこともある。子どもにとって魅力的な場所を写真に撮ってもらい、それを一枚のポスターに仕上げ、掲示した。
課題	若者にもっと来てもらい、未来を担う世代に色んな機会に触れてもらいたい。

## 5. Akademie der kulturellen bildung (文化教育アカデミー) について

### 概要

Akademie der kulturellen bildung (文化教育アカデミー) は、子ども・若者の芸術と教育分野の仕事に携わる人のための継続教育機関です。ノルトライン＝ヴェストファーレン州レムシャイトに位置し、1958年に創立されました。子ども・若者と関わる仕事に携わる人がさらなるスキルアップのために学ぶことができる教育的・学術的教育機関として位置付けられています。

この分野に関わる専門家のトレーニングのほか、専門職協会や高等教育コースと協力して、芸術と教育分野の資格モデルの開発と、資格の認定を行っています。また、専門家による会議や、専門誌の発行・出版など、活動は多岐に渡ります。

アカデミーは、音楽、リズム、ダンス、演劇、ゲーム、文学、視覚芸術、メディア、芸術教育、社会心理学、そしてカウンセリングの高度なトレーニングを提供するドイツで唯一の施設であり、その他多岐にわたる時代のニーズに合わせた新たな学問領域な講習も充実しています。アカデミーで学ぶ場合は、コースを選択することになりますが、毎年共通のテーマがあり、2020年は「ジェンダー」となっています。

施設は、会議室とカフェ併設の大会議室、ダンス専用の部屋、本格的な機械がある美術・工作室、マルチメディアルームなどがあり、アクティブで多彩な授業形態が可能となっています。そして、アカデミーは広い庭と森に隣接しており、野外でも授業ができるようになっています。また、図書室、食堂、110のベッド、バーがあり、短期集中の合宿形式で学べるようになっています。会議室は誰でもレンタルすることができ、授業で使うほか、国際的な会議も行われます。

アカデミーは、非営利団体が運営しており、子ども・若者支援法 (KJHG: Kinder- und Jugendhilfegesetz) 第75条「民間青少年援助の担い手団体としての承認」に基づき、子ども・若者支援を行う公益団体として認められています。そのため、ドイツ連邦共和国 (連邦家庭・高齢者・女性・青少年省) と、ノルトライン＝ヴェストファーレン州 (子ども・家族・難民及び統合省) から運営資金が提供されています。



アカデミーの全体図 (航空写真)

## コースの種類

1日～5日の短期集中的なカリキュラムと、現場実践を組み合わせる資格認定を行う数年単位の長期的なカリキュラムを提供しています。

Bildende Kunst (芸術)

Literatur & Sprache (文学・言語)

Medien (メディア)

Musik (音楽)

Performance (パフォーマンス)

Sozialpsychologie & Beratung (社会心理学・カウンセリング)

Rhythmik (リズム)

Spiel (遊び)

Tanz (ダンス)

Theater (演劇)

Kulturelle Bildung & Interdisziplinäres (文化教育&学際的分野)

→ Künstlerisch-Systemischen Therapie (芸術的全身セラピー)

→ Musik und Medien mit Jugendlichen (思春期の音楽とメディア)

→ その他学際的な数日プログラムなど

## その他

Akademie Regio (地域アカデミー) 地域に開かれた文化と学びの場



裏庭

## Spiel (遊び) コースについて

ドイツでは、子ども・若者に関わる人の多くが Sozialpädagogik (社会教育学) を学んで資格を取得しており、Sozialpädagoge と呼ばれています。遊びに関する資格はそれぞれの団体や機関で独自に発行しており、民間の再教育機関であるこのアカデミーでは Spiel (遊び) というコースで Spielkulturpädagogik (※1) (遊び文化教育学) をはじめとした3つの資格取得に関するカリキュラムが開設されています。

### ● Spielkultur (遊び文化) (3年間)

⇒ Spielkulturpädagogik 認定資格証明書

※2018年春、「Spiel」から「Spielkultur」へとリニューアルされた。

講師 Susanne Endres Nadine Rousseau



### カリキュラムの形態

月～金曜日の4泊5日で行われる授業を1年間に2回行い、3年間で計6回行います。

1回目と2回目の間の期間は、学んだことを、現場に戻って深め実践する時間とする為、数か月間あけるようになっていきます。理論と実践を交互に繰り返し、ゆっくり学ぶことを大切にしています。

### 時間

9:00～12:15 または 9:15～12:30、

15:00～18:15 (場合によって21:00まで)

ただし、月曜日は15:00からはじまります。木曜日はアカデミー全体でのプレゼンテーションが組み込まれ、各コース受講者がそれぞれ学んだことを発表し共有する時間があります。

定員 12～13人

### 対象

主に、プレイバス職員、冒険遊び場職員、青少年活動の職員、学校の先生、図書館の司書などです。Erziehung (幼児児童教育) (※2)・Sozialpädagogik (社会教育) (※3) 等の職業教育学校・大学を卒業した人が対象となります。

### カリキュラムの内容

#### 1年目 基礎

- ・遊びを知る—実際に遊ぶ、それぞれの現場の遊び紹介など
- ・スタッフの役割—自分の強みを知る、スタッフの心得など
- ・集団を学ぶ—ターゲットグループの特色を知るなど
- ・遊びの開発プロジェクト・アイデア開発
- ・フィールドスタディー—他団体の所へ体験に行く

#### 2年目 選択 (どちらかを選び重点的に学ぶ)

- ・多様性
  - 子ども若者ひとりひとりの背景にあるものを学ぶ ジェンダー・貧困・難民・様々な格差
- ・遊びの種類
  - 都市の遊びと田舎の遊び、森の遊び、移動型の遊び

(※1) この資格を取得した人を Spielkulturpädagoge (遊び文化教育士) と呼びます。

(※2) Erziehung とは、幼稚園教諭、保育士、学童保育士等の職種を統合したものであり、主に0-14歳未満の子どもを、教育、保育、福祉の観点でとらえる学問です。

(※3) Sozialpädagogik とは、0歳からおおよそ27歳までの自己発達・自己実現と社会への移行援助を課題とする、その理論と実践の学問です。

### 3年目 実践(実用的なプロジェクトを実施する)

- ・プロジェクト計画立案(資金調達・ロビー活動・広報・協力・アイデア)
- ・プロジェクト概要の作成と講師による助言とフィードバック
- ・プロジェクト実施
- ・プロジェクト報告・評価・振り返り・仲間からの助言

### そのほかの特別なコース

#### ● Mobile Spielanimation (移動型の遊び)

(2年間)

⇒ Mobile Spielanimation 認定資格証明書  
Spielmobile e. V. と共同発行

講師	Susanne Endres
ゲスト講師	Grit Eißler, Stefan Melul
協力	Spielmobile e. V.

### カリキュラムの形態

仕組みはベーシックと同じですが、2年間のカリキュラムとなります。また、これとは別に一週間の基礎講座もあります。

定員 18人程度

### 対象

主に、プレイバスで働いている人や、フリーランサー、大学生などです。ベーシックの基礎(1年間)を受けた人または、移動型遊び場で3年以上実務経験がある人が対象となります。

### カリキュラム内容

#### 1年目

- ・移動型の遊びとプレイバス活動の基礎  
—提供する遊びの種類・保険・責任・開催中の安全対策

#### 2年目

- ・プロジェクト開発・実施

### ● Fit für den Ganzttag (全日制オープン スクールの補助スタッフ向け) (3日間)

⇒ Ergänzungskräfte in der Offenen  
Ganzttagsschule 認定資格証明書

協力 LVR-Berufskolleg  
LVR-Jugendamt Rheinland

### カリキュラムの形態

金～日曜日の3日間を5回行います。

### 対象

全日制のオープンスクールのスタッフなどが対象となります。職業教育を卒業していなく、無資格でも参加できます。

### カリキュラム内容

- ・基礎知識  
教育とケア / 子ども観 / 遊びの多様性 / ジェンダー / 傾聴 / コミュニケーション / 子どもの権利条約 / 学校内での協力関係 / 運動・音楽・語学教育 / 学習と開発・個別サポート
- ・プロジェクト計画・実施・評価のための必要な学び

(根岸基子)

#### 【参考文献】

- ・Akademie der Kulturellen Bildung Programm 2020
- ・生田周二・大串隆吉(著)・古岡真佐樹(2011)「青少年育成・援助と教育」有信堂
- ・IPA日本支部冒険遊び場情報室内 プレーリーダー養成プログラムの開発研究会(2000)「ヨーロッパの「プレーリーダー」-養成と支える仕組み-」平成11年文部省「生涯学習活動の促進に関する研究開発」委託事業
- ・坂野慎二「ドイツの幼稚園教諭・保育士養成政策に関する研究」『論叢』玉川大学教育学部紀要 第16号 2017, pp.1~23

#### 【参考HP】

Akademie der kulturellen bildung  
<https://kulturellebildung.de/>

## 6. ミュンヘン市内の公園について



700㎡の広さを誇るスケートパークシティ。スケートボード、BMX、インラインスケートが楽しめる若い世代を中心に人気スポットとなっています。観覧席も完備。



多くの公園には、木材をふんだんに使った遊具があります。使用される木材は、真っ直ぐに製材されたものではなく自然の形を活かしているものが多いです。



Kleingarten (クラインガルテン)。主に都市部の庭がない家庭が区画ごとに借りる庭。道具などをしまふ小屋を建てる事が出来、共用部分にはビアガーデンや広場、遊び場などもあります。

### ウルリヒさんと行く、 ミュンヘン自転車ツアー

ミュンヘン滞在の一日。元ミュンヘン市建設部門、緑地計画責任者のUlrich Rauh (ウルリヒ・ラウ) さんの案内でミュンヘン市内の公園や緑地を自転車で回りました。



鳥の巣みたいな木製遊具。この遊具のように遊ぶ人が想像力を膨らませて多様な遊びが出来る遊具も多く設置されています。



広大な敷地の英国式庭園。園内には湖やビアガーデン、レストランや日本庭園等多くの施設があります。また人工の運河ではサーフィンを楽しむことも出来ます。



8車線の道路にトンネルをかけ、その上に造られた緑地。遊具のある遊び場や芸術家の作品があり憩いの場となっています。案内のウルリヒさん曰く「以前は最悪だったが今は最高の場所となった。」とのこと。



大きな公園の一角に冒険遊び場。緑も多く固定遊具も充実している公園ですが、その中にも冒険遊び場がある意味とは？右記をお読みください！

## 街中に緑がいっぱい！

慣れないドイツでのレンタサイクルに不安な私達に「走行距離 33km の 8～9 割が緑道だから安心して！」とウルリヒさん。その言葉通りミュンヘン市内は緑がいっぱい。それは B プラン (Bebauungsplan) と呼ばれる都市計画制度で 1 人当たりの緑地面積が 20㎡以上であることや、集合住宅地を作る際には年齢に合わせた遊び場所を数百m以内に作らなければならない、等の決まりがあるためだそうです。

## 公園に大切な 3 つの B

ドイツでは公園に必要な 3 つの B があるとされています。

1. Bench (ベンチ)
2. Brunnen (直訳は噴水、水のことをさす)
3. Baum (樹)

## 日常の遊びと冒険遊び場での遊びの違い

ウルリヒさんとの一日が終わり、派遣団の中に 1 つ疑問が浮かびました。これだけ多くの公園や緑地があり、遊ぶ場所には事欠かないのに、冒険遊び場やプレイバスが盛んに活動しているのはどうしてなのだろうか？その疑問を今年度訪日団団長のゲルトさんと来年度訪日団団長のズーザさんに聞きました。

以下抜粋してお伝えいたします。

『公園の遊具はいつも同じで、安全基準を満たしたものが設置されています。それに比べてプレイバスはいつも異なる遊具を持ってきて、その種類も豊富です。また冒険遊び場の遊具の安全性は、遊ぶ人の責任にあると決められているため多種多様です。そのような環境での遊びは常に同じではなく、変化し展開していきます。また、教師 (プレイワーカー) と共に遊ぶことにより、自分で考える力、自分の限界を知る力、挑戦する気持ち、手先の器用さ、コミュニケーション能力等が高まり、自分に自信が持てるようになります。そして市が援助金を出しているのは「青少年にいい影響を与え、独立した大人になる為に冒険遊びが必要である」と考えているからです。』

このお話を聞いて、日本派遣団は「その通りだよ」と顔を見合わせました。日本で『遊び』を真剣に考えている私たちも、遊びを通して「その人が幸せに生きること」「どんな自分もオール OK！」等を伝えたいと考えています。そこで育まれる様々な能力やコミュニケーションについても同様です。しかし、大きな違いは社会全体での認識の違いだと感じます。子どもを一人の市民として捉えるか、否か。そもそも、子どもが独立した大人になることを求めているのではないのか？そんな思いも抱きつつ、日本での遊び環境をより豊かなものにしていこう！と心に誓ったのでした。

(村野裕子)

## 7. ドイツ派遣事業報告会

「移動型遊び場と拠点型遊び場における青少年指導者の職能と運営のあり方」について検証することを目的に行われた青少年国際交流推進事業「日独青少年指導者セミナー」の派遣事業報告会を開催しました。

2年目となる今年度、日本冒険遊び場づくり協会が主催する公式報告会は東京会場において「遊びが育むまちと市民～シュピール・カルチャー・ペタゴージェ（遊び文化教育士）の挑戦～」と題して、現地で視察・体験・意見交換・交流等を通して得た子どもが豊かに育つためのドイツでのさまざまな取り組みについて報告しました。

公式報告会の他にも派遣団メンバー各自が、自分の活動フィールドを中心に様々な地域において積極的に報告会を開催し、より多くの人々に本事業で得た知見を報告しました。

### (1) 公式報告会 東京会場

#### <実施概要>

日 時：2019年11月23日（土）13:00～17:00

場 所：早稲田大学 早稲田キャンパス 14号館 102号室

参加者：50名

主 催：特定非営利活動法人 日本冒険遊び場づくり協会

登 壇：早稲田大学社会科学部教授 卯月盛夫 先生、派遣メンバー

#### <プログラム>



13:30	開会挨拶	・・・ 関戸博樹
13:35	事業概要の紹介	・・・ 企画委員 梶木典子
13:40	基調報告	・・・ 関戸博樹 清水葉月
14:40	質疑応答	
14:50	ワンポイント解説	・・・ 卯月盛夫 氏
15:10	派遣団から一言	・・・ 派遣団全員
15:20～15:50	派遣団と参加者の交流（休憩含）	
15:50	ワークショップ	・・・ 土肥潤也
16:55	閉会挨拶	・・・ 入江雅子



開会挨拶



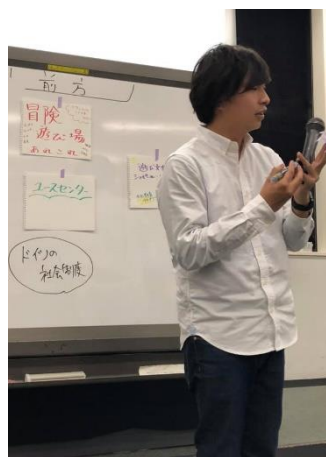
派遣団の紹介



基調報告



ワンポイント解説: 卯月盛夫先生



ワークショップの準備: テーマの設定



ワークショップの様子: 派遣団が提示したテーマ毎に参加者と議論



## 参加者アンケートの結果（回答者数 19名）

### a. 印象に残ったこと

- ・今回行われている活動のことは、今日はじめて詳しく学びました。スマホとにらめっこではなく、小さな頃から自然と人間関係を遊びながら学んでいく環境があること、それを当たり前前の考えとしていること、「外国の教育」ということだけでなく、とても深く知ることができた気がします。スマホやゲームが当たり前の中で、自分で何かを作ったり、自然の中で活動する子どもたちがとても新鮮に感じられました。子ども時代に学んだことは自分の人生に大きく関わっていることを改めて感じました。
- ・社会の中で子ども達の意見が地域の中に反映されていること。子ども達を支える中で、日本とは違い、どのような人材がいるのか。また、プレイパークの中では、何人ぐらいの規模で運営されているのか。
- ・新しく知る情報ばかりで、すべて新鮮でした。ワークショップが特に面白かったです。
- ・建築エリア活動
- ・ドイツの社会について知れたこと、ドイツのイメージが変わった。遊びについて国で全く価値観が違うことを知れてよかった。ドイツの遊び場の写真を見られてよかった。グループワークが楽しかった。ドイツに行ってみたい、住みたいと思った。
- ・ドイツは日本よりずっと子どもに関わる人が「子ども一人一人が主体」という考え方をしっかり持っているんだな～いいな～と思いました。
- ・子ども自身の責任感にまかせ遊びをしているということに、人間としてとらえているんだなと感じました。またそういう音の積み重ねで大人になっていくというビジョンがあるのかなと思いました。
- ・1つ1つの施設紹介にあるコンセプトからまず、やわらかで、それでいて確かなものが言語化され、それを柱に運営されていることに感動しました。子どもが一人の人として大切にされ、その声が活かされるしくみになるには、日々の遊びが（環境が）大切なのだとあらためて思いました。
- ・派遣団メンバーの自己紹介→それぞれの興味関心  
卯月先生の話：「よき市長を育てる」共に学んでいく・発見、提案、活動のプロセス、多

## 様性と寛容

質疑応答→会場には多様な参加者がいるということがわかった。

- ・多様性、寛容というキーワードで Social Patagogik が市民に浸透している事が印象に残りました。1945年～日独のスタートは同じという話がありましたが（卯月先生）状況は同じでも文化圏や地理的政治的状況があるので一概に一緒と言って日本を憂うのは違うかなと思った。
- ・人の育て方が違うというより、どんな人生を送りたいか、送るべきかといった人生観が違うとも感じた。教育以前の話かもしれないなあ。
- ・キーワードとして「多様性と選択肢」
- ・独のインクルージョンな考えかたと英のプレイワークの考え方が少し違うと言ったドックンの一言
- ・途中から参加したのであまり頭に入っておらず、しかし、ゆったりした雰囲気はどれもあるのは気になりました。
- ・子どもが大切にされている。子ども～高齢者まで隔てないサポート制度
- ・多様性を認めない現状に対する、多様性と寛容性を認める場として冒険遊び場があるのではないかと思いました。
- ・とにかくどこも心地よい～～～っていう雰囲気で、椅子がいっぱいってのがいいなあと思った。場づくりにおいてすごく大切なことなのかもしれない。
- ・公園の遊具の多様性から遊ぶことをいかに多様な観点からとらえているのか、が面白かった。

## b. 良かった点、気になった点

- ・今回のような講演会に参加するのは初めてで、周りの方と意見を言い合ったり、質問がたくさん聞けたり、とても楽しい時間でした。今行われているプログラム、わたしが知らないだけでたくさんあることだと思います。自分の興味の分野でさらに学びを深めたいです。どうもありがとうございました。
- ・スムーズだと思いました。
- ・学校が午前中におわること、人材育成機関があること
- ・途中で近くの人と話す機会があったのがよかったです。
- ・質疑応答があったので、とてもよかった。交流の時間が多くて、最初は身構えてしまったけれども、結果的にいろんな方のお話が聞けて良かった。
- ・とても分かりやすく、インプット、アウトプットで学びが深まりました。
- ・臨機応変な対応がなされてよかった。休み時間に派遣メンバーと交流できるのがよかった。時間が短く感じました。時間のやりくりが大変だったと思いますが、もっと話したかった。
- ・表紙の写真がとても素敵で、何の場面かコメントがあればうれしかったです。
- ・明るい雰囲気で素敵でした。うちわで盛り上がる感じと、タイムマネジメントが気になりました。
- ・ワークショップはもう少し時間がほしい
- ・司会の村野さんの進行が上手でよかったです。やはりどうしても時間が足りないと感じるくらい内容良かったです。
- ・卯月先生のお話がよかったです。
- ・参加感があった。最初に派遣団の自己紹介があるのがよかった。
- ・思ったより参加者が少ない。もっとたくさんの人に聞いてもらいたかった。
- ・事実の紹介に加えて、主観的な思い、感想をもっとしりたかった。

## c. 参加者の活動分野（複数回答）

冒険遊び場活動 9人、子どもに関わる活動 7人、  
その他 7人（まちづくり、建築等）

## d. 報告会を知った手段（複数回答）

協会FB 3人、協会会員ML 4人、派遣メンバーから 13人、  
その他 3人（6月のドイツの話、卯月先生の授業で、関係者口コミ）

## (2) 派遣団員による各地報告会

派遣団各自が、全国各地で報告会を開催した。報告会の一部は、当協会のフェイスブックページや会員 ML 等で情報を提供した。全 18 回、合計 511 名の参加者であった。2020 年 2 月 16 日以降開催の報告会の人数については計上していない。

また、2020 年 2 月中旬以降、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、予定していた報告会の一部が、中止や延期、動画配信となった。

実施日	実施者	報告会タイトル	開催地	人数
2019/11/4	土肥潤也	オランダ・ドイツ 未来に教育報告会	石川加賀	27
2019/11/23	全員	遊びが育むまちと市民 ～シュピール・カルチャー・ペタゴギー（遊び文化教育士）の挑戦～	東京都	54
2019/11/26	村野裕子	ドイツ派遣事業報告会 あいくるスタッフ向け	埼玉入間	21
2019/11/28	村野裕子	ドイツ派遣事業報告会 入間未来ビジョン研究会向け	埼玉入間	15
2019/12/1	土肥潤也	ドイツ・オランダ・フィンランド 未来の教育報告会	東京都	65
2019/12/14	相澤孝紀	日独青少年指導者セミナー派遣事業報告会	千葉市	10
2019/12/16	清水葉月・根岸基子	日独青少年指導者セミナー派遣事業報告会	大阪市	5
2019/12/22	村野裕子	ドイツ派遣事業報告会～2週間一挙見せ報告～	埼玉入間	17
2020/1/18	村野裕子・関戸博樹	ドイツ派遣事業報告会～どっくんと一緒～	埼玉入間	18
2020/1/25	村野裕子	ドイツ派遣事業報告会 『大人なドイツの報告会』	埼玉所沢	8
2020/1/25	関戸博樹	くきぼーでドイツ派遣報告会	埼玉久喜	30
2020/1/31	村野裕子・根岸基子	ドイツ視察報告 こども×あそび おしゃべり会	大阪市	4
2020/2/1	関戸博樹・土肥潤也 根岸基子・村野裕子	ドイツから学ぶ ～子どもを取り巻く遊び環境の多様性～	神戸市	38
2020/2/2	土肥潤也	Learn from Education in Finland/Denmark/Germany #これからの教育のゆくえ、#地方のユースワークを考える	岡山市	45
2020/2/4	相澤孝紀	ドイツに学ぶ 豊かな子どもの遊び環境とは？	東京都	22
2020/2/10	相澤孝紀	日独青少年指導者セミナー派遣事業報告会	千葉市	20
2020/2/11	関戸博樹・相澤孝紀	日独青少年指導者セミナー派遣事業報告会	茨城つくば	102
2019/2/15	村野裕子	ドイツ派遣報告会 「冒険遊び場」	埼玉入間	10
合計		18箇所（2/16以降開催分を含まず）		511

## 8. ドイツ研修前後における派遣団員の意識の変容

### (1) 「外向き志向」の変容に関するアンケート結果

#### a. 派遣者の「外向き志向」の値

派遣団の事前・事後アンケートにおける「外向き志向」に関する項目の平均値は、事前が2.3、事後が2.3であり、変容度の平均値は0%であった。派遣団員が事後アンケートにおいて、「外向き志向」と回答した割合は、83%であった。

### アンケート結果集計

事業名： 2019年度青少年国際交流推進事業 日独青少年指導者セミナー

※太枠に記入（太枠以外は自動で表示されます）

#### ■ 事前アンケート

##### 配布・回収数

対象者	配布数	回収数	回収率	備考
小学生				
中学生				
高校生				
大学生				
その他	6	6	100.0%	プレイヤーなど

※「所属」に「その他」を選択した場合は、備考欄にその内容を記述してください。

##### 外向き志向

項目	思う	少し思う	あまり思わない	思わない	合計
日本人として世界に貢献したい	2	1	2	1	6
外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたい	3	3	0	0	6
交流した外国の人と将来も繋がりをもちたい	5	1	0	0	6

#### ■ 事後アンケート

##### 配布・回収数

対象者	配布数	回収数	回収率	備考
小学生				
中学生				
高校生				
大学生				
その他	6	6	100.0%	プレイヤーなど

※「所属」に「その他」を選択した場合は、備考欄にその内容を記述してください。

##### 外向き志向

項目	思う	少し思う	あまり思わない	思わない	合計
日本人として世界に貢献したい	2	2	2	0	6
外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたい	3	2	1	0	6
交流した外国の人と将来も繋がりをもちたい	4	2	0	0	6

#### ■ 事前・事後 外向き志向増加率

項目	事前	事後	増加率
日本人として世界に貢献したい	1.7	2.0	20.0%
外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたい	2.5	2.3	-6.7%
交流した外国の人と将来も繋がりをもちたい	2.8	2.7	-5.9%
合計	2.3	2.3	0.0%

※以下のとおり数値化し、平均値を算出

思う： 3点

少し思う： 2点

あまり思わない： 1点

思わない： 0点

b. 派遣団員が「外向き志向」に変容するために行った工夫

派遣団員が外向き志向を高めるために行った工夫は、以下のとおりである。

- ・事前研修において参加者同士がコミュニケーションをとりやすくすること
- ・旅のしおり作成で参加者の不安・準備不足を解消すること
- ・ホームステイ体験でドイツ人の生の生活に触れること
- ・日本文化紹介や自分の活動紹介
- ・ドイツ滞在中のミーティングやレポート提出で体験を言葉にすること

c. 「外向き志向」の上昇に関する考察

今回の派遣団メンバーはそもそも外向き志向が高いメンバーであり、結果的に外向き志向の増加にはつながらなかったが、このことは決して事業の成果が得られなかったわけではなく、むしろ日独交流で得たことを日本での自分たちの活動に実践的に生かすことについて深く考察している点で成果があった。

事業実施団体としては、今後の交流において参加者間で円滑なコミュニケーションが取れるよう配慮していきたい。また、視察や体験の場面において表面的な交流に終わらず、事業参加の意義を確認出来る意見交換の時間を取り入れるなどを心がけたい。その際にやはり日独文化の違いなどを踏まえた有能な日独通訳の存在が非常に重要である。

## (2) 派遣団のドイツ研修での意識の変容

ドイツにおける派遣研修後、「渡独を終えて今後はどう活かしていくのか」というテーマで、派遣団員 6 名に対して研修を振り返り総括するレポートを求めた。

### 相澤 孝紀

#### 【はじめに】

渡独を終え、いくつか報告会を実施する機会をいただきました。

様々な場所でドイツの取り組みや街の様子・社会制度を聴講者の方々と共有していく中で、日本との制度の違い（子ども若者支援法や補完性の原理など）・「遊び」が果たす意義の違い（教育的な効果を得るために遊びというアプローチに有用性がある、など）・目指す先の違い（子どもの遊ぶ権利を保障するために大人の立ち入りを規制する、など）に、（自分自身も改めて）驚きをもって共有していく日々です。

日本において私が何を果たすべきか、自分にできることはなんなのか、それについてまだまだ答えは出ませんが、報告会を通して多くの方と一緒に「遊び」「子ども」「社会」について考える材料をいただけたと感じています。私の見聞きしてきたことをより多くの人に共有する機会を作ること、それが最初に私が行うべきことと考えています。

#### 【ドイツでの学び】

冒頭でも少し触れたように、ドイツと日本には様々な部分において違いがあります。

中でも、社会における子どもを取り巻く支援形態の中で最も大きな違いを感じたのは『子どものために大人がすべきこと』の違いでした。

直接子どもに関わる大人が「子どもたちのためにできること」とは一体なんなのでしょうか。

知識や技術を教えてあげること？ 間違えないように訓練すること？

失敗しないように手を添えて導いてあげること？

ドイツの答えは「子どもの主体性を保障する」こと、でした。

では主体性を保障するとは、どのような意味なのでしょう。

主体性という言葉調べると、「自分の意思・判断で行動を決めること」という意味があります。ドイツではまさにこの通り「子ども自身が考え、判断し、選択すること」を大切にし、それが実現できるように場所やプログラムを整えることが大人の仕事とされていました。

子どもが失敗しないようにフォローすることや、より良いものが出来上がるようにアドバイスすることよりも、自分のイメージを実現できることや、試行錯誤すること

の方が大切だと明確に位置付けられていました。そしてそれは冒険遊び場の関係者に限らず、子どもに関わる大人にとっては当然のように大切にされていたのです。

翻って、日本で子どもに関わる大人が大切にしていることは为什么呢。

冒険遊び場をはじめ一部の活動では、「子どもたちの主体性」を大切にしながら実践を積み重ねてきています。反面、多くの子ども施設や環境では、「効率性」「安全性」「完成度」が優先され、追求されている状況にあると感じています。子どもたちの主体性が発揮されることよりも、大人のイメージに添うこと（もしくは大人が管理できること）が重要とされている場面が多いのではないのでしょうか。

子どもに関わる大人が、共通認識として「子どもが自分らしくあることを受容されること」「主体性が発揮される環境を整えること」そういったことを実現していくことが職責であると捉えられるようになると素晴らしいのに、と感じてしまいます。

#### 【今後にかすこと】

報告会を実施する中で、聴講者の方から何度も質問をいただくのは「ドイツに対して日本側が提供できるものはなんなのか」という質問です。

とても難しい質問です。

私からは、『(災害時など) 困難な状況下における子どものケア』と『地域コミュニティの再生』の2つを柱にお答えをしています。特に後者は私の所属するプレーパークにおいても、重要なファクターとして活動をはじめた時から取り組んできました。

ドイツでは専門性や子どもの権利にフォーカスしているため、子どもの権利が最大限発揮できるために時に大人が遠ざけられることがあるようでした。一方、日本では多くの冒険遊び場活動は地域に根差し、地域で作られ、子どもたちだけでなく地域の方の居場所としても機能しているように感じます。それは子どもの遊び(場)を支えるのは、人も含めた豊かな環境が必要であると考えているからではないのでしょうか。

子どもたちを支えるのが一握りの専門家でなく、たくさんのアマチュア(子育て経験者や元子どもである青年世代など)たちと一緒に支えていくこと、それが日本の強みであり良さであると感じています。

専門性に特化するのではなく、地域をはじめ様々な人へプレイワーク的な考え方や子育て観を広めていくこと、そのためにドイツで学んだことは大きく意味を持つと考えています。

今後は冒頭でも触れた通り、まずは報告会を重ねて多くの人へドイツの政策や考え方を伝えること。そして日本の良さである地域性を大切に、「子どもたちに対してできること」をみんなで考えるきっかけを生み出していきたいと思っています。

同じ想い・同じ言葉で繋がることは、遊び場を継続し広めていくためにとても重要なことだと考えているからです。

## 佐藤 公俊

私は日本、特に九州を中心に冒険遊び場や移動型遊び場を広めていく活動をしている。それに伴った担い手の人材育成に関心があり、2018年、2019年と2年続けて今回の事業に参加した。その中で今後を活かしたいと感じていることは

- ①モバイルプレイの手法
  - ②人材育成
  - ③社会運動の一つとしての取り組み
- の3点である。

### ①モバイルプレイの手法

個人的な関心事でもあったモバイルプレイの手法について、様々な実践事例を視察することができた。九州でモバイルプレイの取り組みを始めたばかりの中で、実践事例を見ることができたことは非常に参考になった。中でも車載遊具の考え方や遊具と素材のバランスの考え方、車の周囲に広告を載せることによりスポンサーを募集して、車の購入費を賄う方法は日本でも活かすことができると考えている。

### ②人材育成

遊びの活動を広げていく上で必要となる担い手を増やすためには、学びの場を保証する必要がある。一方で、日本では有償のプレイワーカーは非常に少ない。今回視察したレムシャイトアカデミーの研修の事例は、担い手を増やすこと、活動および職業としてのプレイワーカーの持続可能性を高めていくことに参考にできるものだと思う。また、訪問した施設で「主役が子どもであること」をプロジェクトに関わってくれるボランティアの大人にしっかりと伝え、チームとしての考え方を統一し、子どもが主体の場を作るための大人の役割を明確化していた。日本においても、「遊びに関わる大人」の間口を広げていく上で、しっかりと場としての大事にしたいことを共有することで、より多く子どもたちに自由な遊びの機会を保証する機会につながるようになるであろう。参考になる事例だと感じている。

### ③社会運動の一つとしての取り組み

渡独中に参加したモバイルプレイのフォーラムにおいて、「polity=政治的」という言葉が多く使われていた。目の前子どもたちに遊びの機会を作る取り組みだけでなく、社会に広く投げかけ社会を変えていくことが、子どもたちの遊び環境を充実させることにつながるのだろう。その一つの手法としてロビー活動や、社会運動の一つとして取り組みをしていくことは大切なことだと考える。

上記を日本での実践に活かしたいと考えている。しかし、注意しなければならないのは、今回視察したのは「ドイツ型」の事例であるということ。なので、そのまま真似をするという形ではなく、日本型に、その地域にあった形に、取り組み人たちができる形に組み替える必要があると考えている。

## 清水 葉月

私は、今回のドイツへの派遣事業を終えて、今後の活動に活かしていきたいことは大きく2つあります。

1つ目は、訪れたドイツの子ども・若者支援の施設や団体で、子どもたちとの活動や関わるうえで大切にされていた“将来主体的な市民になるために”という長期的視点を、日々の活動の中で持つことです。渡独中に訪れた施設は、年齢に応じて多様な施設が存在し、子どもたち自身が、放課後に自分が過ごしたい居場所を選ぶことが出来ていました。また、子ども・若者支援の現場では、その時そこにいる子どもたちの声を聞き、運営の中で子どもたちの声を実現することが当たり前になっていました。このようなことは、ドイツの子ども・若者に関わる法整備が整っていることや多くの子ども・若者の支援者も前提として持っていた「ゾツィアルペタゴギック」という理念があるためでした。

子どもたちは将来大人になり、まちや社会を動かす市民になる存在であり、「子ども」と「大人」など途切れ途切れではなく、生涯にわたってすべて繋がっているのだということが、現場の中でも、またドイツ社会の中でも感じる事が出来ました。

日本では、子ども・若者支援の場は年齢別に分かれ、乳幼児期の支援、学童期の支援、青年期の支援など専門性を増す一方、支援がそれぞれぶつ切れになってしまうような状況も存在します。また社会の中では、子どもと大人、高齢者や障がい者など多様な人々がそれぞれに分けられて考えられることが少なくありません。

そのような中で、人が生まれて主体的な市民になっていくには、年齢やその人の特性などを越えて、生涯にわたって社会と繋がることが出来、多様な学びの機会に出会うことが出来る事が大切であると考えます。私は自身が働く児童館で、0歳から18歳までの子どもたちとその保護者をどのように社会と繋ぎ、彼らが社会に対して声を発信する機会を作っていくかを大切に考えて行きたいと思っています。

2つ目は、子ども・若者支援の場や支援者だけでなく、まちや地域に対して、1つ目のような考え方を広めて、共感する人を増やしていくことです。

先述したように、子ども・若者支援は、その年齢だけで終わるものではなく、その後の生涯にわたって続いていくものだと考えます。そのように考えると、子ども・若者支援はその現場だけでなく、地域や社会の中で市民として社会とつながり、参画していく機会と場が必要です。まちや地域の中で子ども・若者が将来の市民であることが理解され、尊重されるため、今回の渡独の学びを広めながら、共感する人を増やしていければと思っています。

## 土肥 潤也

ドイツでの2年間の交流事業の経験を経て、遊びの実践からの学びはもちろん、実際に現場を見ることや実践者との交流を通じて、その根底にある哲学に触れることができた。具体的な取り組みを真似することはすぐにできるが、あくまでそれは真似であり、本質的な実践には結びつかない。ドイツに足を運び、自分で見聞きできたことで、日本の課題がより浮き彫りになり、どのように日本で子ども・若者の社会教育実践を広げていくかの言語化が進んだことは自分にとって大きな体験となった。

本事業への参加は2018年と2019年の2ヶ年の関わりとなった。1年目の交流事業の参加後は、その学びを少しでも形にしようと、自分の活動フィールドである静岡県焼津市の駅前通り商店街で道遊びのプロジェクト「みんなで作る、みんなのアソビバ」に取り組み始めた。このプロジェクトは、市民が公共空間の担い手として、道や公園、広場等に遊び場を展開するドイツの取り組みに刺激を得たものである。ドイツのプレイワークに関わる活動は、一側面から見れば、子どもの遊び環境を豊かにする活動であるが、多面的に捉えれば、市民の公共スペースたる道や公園、広場を自分たちで自治し、豊かにする営みとも考えることができる。また、こうした公共スペースでの活動は、遊びの重要性を日常に位置付けることによって、市民社会へのアドボカシー活動の意味も持っている。非常にシンプルな活動ではあるが、中長期的な社会を見据えた未来に向けた活動として機能している。

また、それと同時に、プレイワーカーを中心とした社会教育を担う人材の養成にも大きく力を入れていた。日本でのNPO活動は、属人的になりやすく、特定の強い個人がいなくなると、活動が継続しなくなってしまうケースも多々ある。ドイツも同様の課題は抱えているが、きちんと先を見据え、将来を担う人材を養成する仕組みづくりに取り組んでいた。これは、豊かな遊び環境を持続可能にする未来への戦略であり、日本は多く学ぶことがある。

ミュンヘン市でのプレイワークの歴史を辿れば、40-50年近い蓄積があり、現在の豊かな遊び環境に繋がっている。焼津市での取り組みはまだはじまったばかりであるが、40-50年先をいくミュンヘンの姿を追って、焼津らしい遊び場づくりに引き続き取り組んでいきたい。

## 根岸 基子

### 「遊び」をもっと身近なものに

今回の視察に私が期待していたことは、「プレイワーク研修」「学校と遊び活動」「ロビー活動の方法」を知る事でした。けれども私が遊びの分野に興味を持った根本的な問い、「人が育つとは」と、「人を育てるとは」ということを、もう一度考えさせられた機会となりました。きっかけになったのは、「プレイワーク研修」を突き詰めていった先に出会った、「社会教育学」という学問です。

「社会教育学」とは、家庭と学校以外の領域（放課後）における、児童青少年（0歳～27歳）援助のための、理論と実践の学問とされています。課題のある子どもの援助だけではなく、すべての児童青少年が「良き市民（自分の頭で考え・判断し・行動できる）」となるために、ひとりひとりに寄り添いながら、本人の主体的な成長と自立を援助することを目的としていました。

視察に行った遊び場で働く職員、ユースセンターで働く職員は、この学問を学んだ人々であり、後に調べたら、保育所、青少年文化施設（児童館・青少年センター）、青少年教育活動、青少年国際交流活動、団体活動（子ども会・青年団体・スポーツクラブ）、ストリートワーク、学校ソーシャルワーク、児童養護施設、自立支援施設、少年裁判支援、カウンセリング、行政の青少年局と、幅広く児童青少年分野に関わる人の必須の学問でした。

また、ドイツの教育という概念は幅広く、学びは大人や他者から与えられるものだけではなく、自分で見つけ深めていくこと、そしてその行為をサポートする行為も教育として捉えられています。

日本の「遊び」分野で大切にされている、「主体的に生きる」という価値観が、ドイツでは人の育ちに当然のものであり、それを援助するのが教育の役割とされていました。だからこそ、「遊び」も教育の大事な要素として重要視されていました。そして、「主体的に生きる」人々が協働するときに必要な「ともに生きる」という価値観も同じくらい大切にされていました。

私は日本も、「主体的に生きる」という価値観が、生まれた時から誰にとっても当たり前で、その「主体的に生きる」人が他者と「ともに生きる」ことを大切しあえる、そんな社会にしていきたいです。なので私は、今回ドイツ視察で学んだことを多くの人々と共有し、「遊び」がもっと誰にとっても身近で大切なものと認識されることを目指して、多様な人々と日々の活動を丁寧に続けていきたいと思います。

## 村野 裕子

### 『持続性と多様性』

2年連続で派遣団として渡独し、多くの学びの中から心に残っているキーワードは「持続性」と「多様性」の2点である。

訪問した先で、こどもの遊びに関わる多くの大人が、自分たちの目指す目標に『持続可能な社会』を挙げており、ドイツの社会全体が目先のことばかりではなく、ずっと先の未来についても考えているのだと感じた。環境についてはもちろんだが、一人一人が生きていく上で、人間として豊かに生きていくために大切な事、その人がその人なりの幸せな人生を持続することも大切に考えられていた。

そして『多様性』のある社会が大切であること。個々の国籍や人種の違いを認め合う、という当たり前のことから、人間だけではなく動物や物や道具のことまで、多くの場面で「多様性」が大切にされているのを目にした。遊びの中にも生活の中にもその考え方が強く根付いており、それが遊びの幅の広さにも繋がっているように感じる。そして、その遊びの幅の広さが、文化・環境・教育等にも繋がっていた。

この2点は、言うまでもなく日本でも大切なことだ。しかし、今の日本は消費を続けていくだけで持続可能な社会とは言えないと感じる場面が多々ある。環境問題も然りだが、こども達に対する教育の場面でもそう感じている。目先の成績や進学先などにとらわれすぎて、どのように生きていくことがその人にとって幸せなのか？という点が見逃されているように思う。

多様性についても同様で、言葉では「多様性」の大切さを耳にするがそれを受け入れられない場面も多いように思う。個々が違うことは当たり前、どんな人が居ても当たり前、という考え方は浸透していないように感じる。

私は、自分の関わる活動の中でこの2点の大切さを伝えていきたい。乳幼児親子が集まる「子育て支援センター」、雑木林や河川での「外遊び」、小学校での「放課後子ども教室」、その他様々な活動に関わっているからこそ、出来る事があると感じている。その伝える手段は「遊び」である。ドイツでは『遊びは子どもの生活そのもの』という考え方が浸透している。そのため普段から自分で考え、自分の考えで動く、発信することが当たり前となっている。そして「教育＝遊び」との考え方もあり、遊びを通して様々な教育も行われていた。

日本では教育と遊びは決してイコールではない。しかし、遊びの大切さを語るには教育からの切り口も必要であると考えている。楽しく、多くの人が興味を持つ切り口を工夫しながら、こどもにとって「遊び」どんなに必要であるかを伝え続けたい。

# 令和1年度（2019）事業総括

受入においては、各地の冒険遊び場活動団体の協力を得て、ドイツ団メンバーに、日本の冒険遊び場の紹介のみならず日本における子どもの生活の現状説明や課題解決に対するさまざまな取り組みの視察の機会を提供することができた。ドイツ団を迎え入れる各団体も、自分たちの活動を理解してもらえよう工夫をしながら準備を重ね、冒険遊び場や施設に訪れる親子とともにドイツ団メンバーとの交流を楽しむ機会を得た。またホームステイに関しては、東京都品川区では7名が4泊ずつ、山形県東根市では7名が2泊ずつ行うことができ、日本人の暮らしを体験することによって、ドイツ団がより深く日本の文化や日本人の心に触れる機会となった。

派遣においては今年度2年目で、昨年以上に深く目的意識をもって派遣に臨めるよう、事前研修においてテーマ別のプレゼンテーションをしたり、各人の役割分担を明確にした。ドイツ滞在を通じてメンバー同士協力して円滑にそして最大限の効果があげられるように準備をした。

ドイツへの派遣前半のミュンヘンでは、多くの公園を回り多様な公園の在り方を見たり、日本の遊びを世界各国のプレイワーカーに紹介し実践するワークショップを行い、子どもの祭りにも出展して日本文化紹介を行った。後半はレムシャイトに作られた研修施設に宿泊し、放課後の青少年事業に関わるスタッフの研修システムについて話を聞き、実際に自然豊かな環境の中で語りあうことを通じてじっくり考察する時間を体験した。またドイツの冒険遊び場や青少年のためのさまざまな活動のための施設を視察し各団体の運営者やプレイワーカーと意見交換をすることで、日本の冒険遊び場や青少年施設との違いやその背景にある子ども観や遊びのとらえ方を学んだ。また、ドイツの歴史や文化に深く触れることにより、行政機関や市民団体の子どもの遊び政策に対する考え方について理解を深めることができた。

帰国後の当協会主催の報告会では、派遣団メンバー全員で、準備・運営・報告を行った。また、派遣団各自が全国各地で報告会を何度も開催したことは、本事業の成果普及につながったといえる。報告会開催や日独報告レポートの発行を通じて、6名の派遣メンバーは、ドイツで得た知識・情報を、多くの人々に伝え、共有し、外遊びの推進に関心を持つ人たちはもちろんのこと、そうではない人たちにも、子どもの外遊びの大切さを伝えることに寄与できたといえる。

ドイツの実施団体と当団体は、子どもの外遊びを推進することにより子ども達の心身ともに豊かな成長を目指すという共通のミッションを掲げており、今回の交流は日本における冒険遊び場づくりの活動や子どもを支える活動の幅を広げるうえで大きな成果であったといえる。今年度の成果をいかし、今後につなげていきたい。

令和1(2019)年度 文部科学省委託事業  
日独青少年指導者セミナー 受入・派遣事業 B3  
成果報告書

企画委員 関戸博樹(代表・派遣団長)、梶木典子(副代表)、入江雅子、嶋村仁志、  
関戸まゆみ、久米隼(事務局長)

発行 特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会  
〒154-0003 東京都世田谷区野沢 3-14-22  
Tel/03-5430-1060 Fax/03-5432-9114  
<http://bouken-asobiba.org/>

発行日 2020年3月

本報告書は、文部科学省の委託事業として、特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会が実施した令和1年度「日独青少年指導者セミナーB3(文化分野)」の成果を取りまとめたものです。従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。